

八幡野港の朝市再開のお知らせ

10月から再開します！

5月以来、伊勢えび漁の禁漁期に併せて中断していた八幡野港での朝市は、10月に再開します。天候や月齢によって漁ができないこともありますので、これまで通り、伊勢えび漁の刺し網を入れた日に、朝市の開催を「おさかなクラブ」にLINE登録をされた方々へご連絡します。LINEでの連絡は、朝市開催日の前日午後6時頃になります。また朝市の開始時間は、冬季も含めて午前6時といたします。

朝市に並ぶおさかなは、特に高級魚はその日の漁の成果で違ってきますので、ご来場のお楽しみです。

アカハタ、イシガキダイ、スズキ、コチ、真鯛の高級魚は必ずあるとは限りませんが、朝市に並んでいればラッキーです。ヒメジの仲間で、通称「おじさん」は高級魚と言ってもいいんですが、これは必ず獲れます。それも皆さんにお買い上げいただけるくらいの漁獲量が期待できますので、是非一度お買い上げいただき、味わっていただきたいと思ひます。お刺身でよし、焼いても煮てもおいしい魚です。

高級魚：アカハタ、イシガキダイ、スズキ、真鯛、コチ、ヒメジ（オジサン）



高級漁らしき!?

最近ではスーパーでお刺身でも出ている「ブダイ」は、朝市では1尾300円くらいの大衆魚ですが、刺身だけでなく煮つけでも美味しい魚です。「ブダイ」をはじめ朝市に多く出る大衆魚の「サンノジ」や「タカノハダイ」は鱗の処理が大変ということですが、是非一度お試しください。

なかでも「タカノハダイ」は白身の魚でお刺身でも美味しいですが、そのまま鱗を取らずに内臓を取って焼くと蒸し焼きになって手軽に美味しく食べられます

このほかサザエは毎回の人気商品で、朝市開始とともに売り切れという状況なので、おひとり様2個というような限定をさせていただくことがあります。漁師さんのご好意でサバを釣ってきてくれることがあります。（もちろん朝獲れです）

（注）「おさかなクラブ」へのLINE登録は、本紙に記載したQRコードからご登録下さい。
（「やんも」創刊号に誤ったQRコードを記載しましたことを改めてお詫びいたします）



大衆魚らしき!?



編集後記

第2号の発行にあたり、編集委員一同、まだ慣れない作業に四苦八苦しながらも何とか形にすることができました。多くの方々のご協力に支えられての完成であり、感謝の気持ちでいっぱいです。

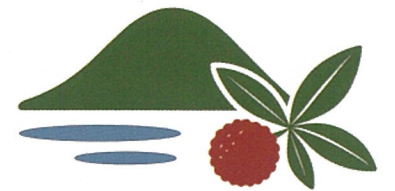
「やんも」が続いていくことで、伊豆高原のまちづくりの輪がさらに広がり、地域を思う人の想いがつながっていくことを願っています。今後も継続して取り組んでまいりますので、引き続きご意見・ご協力をよろしくお願いいたします。

機関紙やんも 編集委員

為ヶ井 真佐美
利岡 正基
徳本 政幸
花房 義明

第2号

やんも



2025年10月1日

発行者 伊豆高原エリアまちづくり協議会

伊豆高原エリアまちづくり協議会(まち協)の「まちづくりの進め方」

伊東市の総合計画には、まちづくりのアウトラインという検討すべき課題が網羅されています。この網羅的な計画内容について論議しても、まちづくりが具体的に進むわけではありません。「まち協」は私たち住民が、住民の論議や対話を通じて何を実現したいかを絞り込み、実現のための方策の検討と、その方策を実行するための住民の協力体制の確立を図って、具体的な成果を目に見える形で実現することを目指します。今回は、まち協がどのようにプロジェクトを立ち上げ、推進体制を確立し、具体的な成果を実現していくか、というまちづくりの進め方について明らかにしたいと思います。

ステップ1：課題の選定＝プロジェクトの立ち上げ

まち協を構成するのは企業・団体ですが、企業・団体の構成メンバーはすべてまち協のメンバーになります。まずは、それぞれの企業・団体の中でまちづくりの課題について論議して、まち協に課題を提案していただくと、その提案について役員会で論議し、担当者の選任を含めどのような体制で進めるかを決めてプロジェクトをスタートさせます。ただし、人員の制約がありますので、提案された事項について、すべてプロジェクト化できるかは、その時の状況を見て判断することになります。

ステップ2：課題の実現に向けた推進体制の確立

実現する事項を明らかにして、立ち上げたプロジェクトに参加したいという人を募ります。専門家の助言を求めることもありますが、まちづくりは地域住民が主体となって進めるべきものであり、基本的には会員のメンバーによってプロジェクトを推進します。プロジェクトが前進すれば活動内容が広がりますので、推進メンバーの増員をその都度計ることになります。伊豆高原には全国からいろいろな人が集まっています、人材の宝庫ともいわれています。地元の歴史や風土に詳しい方もたくさんおられます。こういう人たちの協力を得てプロジェクトメンバーを充実させていきます。なお、プロジェクトは、部会として立ち上げる場合もあれば部会の中のプロジェクトとして立ち上げる場合もあります。

ステップ3：地域の人々の対話の推進

プロジェクトの課題や進め方について、地域住民相互の直接的対話を充実させることが重要です。そのような場を設定することは、プロジェクトの一つの課題になります。高原には地域に根差した方や日本全国から伊豆高原に住みたいと言って移住してきた方がおられます。様々な経験をされ各地の慣習に馴染んだ多様な人々が伊豆高原に沢山集まっています。もちろん外国の方も多くおられます。そうしたそれぞれの人の経験や習慣をお互いに理解し尊重する中で、共通するまちづくりの姿を創り出していくことが、プロジェクトの課題の実現にとって非常に重要なことだと考えています。住民が話し合っ、「それはいいね」ということを紡ぎだすことが、まちづくりにとって非常に重要なことだと考えています。

ステップ4：課題実現の具体的手段の検討と推進（官民の取り組み）

私たちは、要望をまとめて行政に要請し、それで終わりにするようなまちづくりはやりません。地域住民として責任をもって、課題の実現のために汗をかきます。官民の協働作業としてまちづくりを推進するので、課題実現のための方策の検討や推進は私たちのやるべきこととしています。国や県への働きかけや、地域での働きかけも私たちはやります。課題が実現することが一番大事なことです。



楽しくなければまちづくりじゃない！

私たちが考えるまちづくりは、魅力のある豊かで暮らしやすい「まち」を作っていくというものです。言ってみれば住んで楽しい「まち」を作ることです。住民の笑顔があふれる「まち」を作るのですから、私たちのまちづくりは楽しい作業でありたいと願っています。



伊豆高原地域の公共交通利便性向上対策

令和6年度までの取り組み

伊豆高原地域の交通弱者対策については従来、伊豆高原地域創生協議会で検討してきましたが、令和6年度以降は伊東地域交通基盤協議会や伊東市とも連携して活動しています。

伊豆高原地域の交通弱者（高齢者・身体能力弱者・病人等）にとっては、バス停までの距離や高低差、低い人口密度を克服せねばならず、都市部に比較して大きなハンディキャップがあります。単純に交通空白地域を無くすだけではなく、このハンデを克服し、且つ、実態に合わせて利便性を上げねば意味がありません。

この目標を充たす当地に最も相応しい手段はミニバスなどで住民の自宅・目的地間を自宅発着で利用出来るシステムです。

昨年（令和6年度）は基本をここに据えて運行地域や共通の目的地、便の時刻表などを設定して1月、2月の間、第1回実証実験を行い、伊豆高原・城ヶ崎地区で約180名の参加の下、一定の評価を得ることが出来ました。

乗り越えねばならない大きな課題

これらの検討を進める時、避けられないのが既存の交通事業者との棲み分けに係る問題です。基本的には互いを尊重し、理解し合った調整の上で共に満足できるシステムが構築できればいいのですが、既存公共交通機関の運行上利害関係の発生がある場合は、総論では合意できても、各論になるとなかなか調整できないこともあり、その場合は根気強く調整を続けお互いの妥協点を見つけることが必要となります。

交通利便性の確保は住んでいる人にも、移り住もうかと思っている人の為にも重要な課題で、「住みやすい、生活しやすい伊豆高原というまちづくり」実現のため、今こそ官民一体となって真剣に取り組まねばならない、まさにまちづくりの根本課題と言っているでしょう。

伊東市には強力な交通行政のリーダーシップを求めると共に、当まちづくり協議会も問題解決のため一段と努力したいと思っています。



ミニバスのイメージ写真。
実証実験ではタクシーを使用し、それと分かるようにステッカーを貼ります。

令和7年度の活動計画

当まちづくり協議会は引き続き伊東地域交通基盤協議会と連携して課題解決に取り組んでいきます。

同協議会は本年度も期間を11月中旬から2月末まで約3か月半に拡大して第2回の実証事業を以下の内容で実施します。

- 令和6年度の残存課題（広告告知の徹底、予約の簡便性など）の解決
- 無償運行及び有償運行期間を設け、公共交通連携、商工連携を前提とした運行
- 潜在ニーズの高い“通学便”、“通勤便”を検討し、可能であれば実施する。
- 事業化を想定した時の課題解決（利用者増大のための取組みと運行コスト削減施策）



自然環境保全部会活動の紹介

伊豆高原まちづくり協議会の「自然環境保全部会」は、この地域の豊かな自然を未来へつないでいくために活動しています。伊豆高原は観光や移住先として人気がありますが、近年は空き家や空き地が増え、樹木の越境や倒木の危険、野生動物の侵入、さらにはヤンバルトサカヤスデの繁殖など、暮らしに影響が出てきています。「景色が損なわれて残念」「子どもたちが安心して遊べない」といった声もあり、地域ぐるみで向き合う必要があります。



知ってもらうことから始まる環境保全の取り組み

私たちは、まず「知ってもらうこと」を大切にしています。2023年度には伊東市のSDGs推進補助金を使い、自然を守るための基本的なルールや心得をまとめたリーフレットを作りました。自治会や不動産会社を通じて配布し、「なるほど、こういうことなんだね」と関心を持ってくださる方が増えています。また、2025年3月には映画上映会とトークイベントをお手伝いし、参加者と一緒に環境や暮らしについて考える機会を持ちました。「これからの活動に参加したい」という前向きな声もたくさん寄せられました。



空き家寄付バンクでつくる新しい地域の価値

もう一つの柱は「空き家や空き地を地域の財産に変えること」です。例えば、小さな公園や家庭菜園、集会の場として活用できれば、負の遺産ではなく地域の宝になります。そのために「空き家寄付バンク」という仕組みを検討中です。市場には出にくい物件を地域に寄付してもらい、みんなで使える場所として生かしていこうという取り組みです。こうした活動を支えるために、不動産を扱えるNPO法人の設立も視野に入れています。

伊豆高原の未来を据えた2025年の歩み

2025年度は、リーフレットの改訂の検討やホームページでの情報発信を進め、さらに多くの方に知っていただきたいと思っています。そして「空き家をどう活かすか」という現実的な仕組みづくりに一歩ずつ取り組んでいきます。伊豆高原の自然は、ここに暮らす人も訪れる人も魅了してやみません。その自然を守りながら、安心して暮らせるまちを次の世代に渡していくために、みなさんと一緒に考え、活動していきたいと思っています。

自然環境保全部会の取り組み

取り組み	目的	経緯
1. 市民勉強会の開催 勉強会、講演会を開催し、住民のリテラシー形成	■ 伊東市の環境保全のための取り組みや条例を理解する ■ 市民と行政と対話を深める	■ 2023年10月18日に「伊豆高原の自然を守るために知っておきたい3つのこと」というテーマで住民が環境保全のためにできる具体的な行動について学ぶ機会を提供した。 ■ 2025年3月30日にトークイベントにて参加者と一緒に環境や暮らしについて考える機会を設けた
2. リーフレット制作 地域住民や移住者向けのリーフレット、ルール作り	■ 住民に規制、条例の縛りがあることが理解されていないため、リーフレットを通じて、住民やこれから移住する方向けに自然環境保全について啓蒙する（意識醸成）	■ 「リーフレット作成委員会」を発足し、地域住民や移住者向けに「自然環境保全リーフレット」を作成し、自治体、不動産会社等に配布。
3. 空き家寄付バンクの提案 空き家（放置されている空き家）について、空き家寄付バンク設立を伊東市へ要請	■ 放置されている空き家に小動物が住みつく問題が、近隣への影響が出ている ■ 集会所等で活用することも可能で、自然環境保全以外にも波及する	■ 全国的に空き家問題が深刻化する中、伊豆高原でも別荘地の長期放置や相続放棄の増加が課題となっている。空家特例法改正を受け、「空き家寄付バンク」設立を検討 ■ 不動産を扱えるNPO法人設立を目指す